

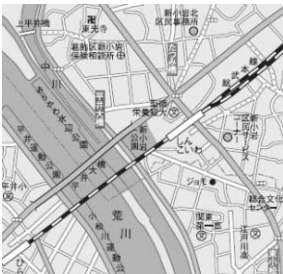
父子三代百年の自主防災

小宮 康孝

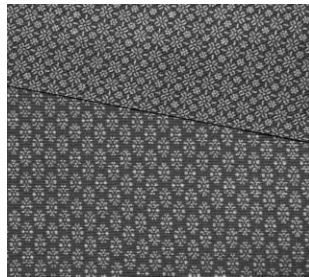
1. はじめに

明治40年（1907年）に浅草で創業し、大正12年（1923年）の関東大震災から逃れて現在の土地（東京都葛飾区新小岩：荒川放水路の左岸すぐの地）に移り住んだ。

江戸小紋の職人として「人に後ろ指を指されぬ仕事ぶり」を誇った父親の跡を継ぎ、重要無形文化財保持者（人間国宝）として認められた。息子へ、この貴重な伝統技術の継承に併せて、自ら行う水害への備えについての継承も行っている。



小宮家周辺（東京都葛飾区）



江戸小紋作品



染物工場での作業

自分で自分を守る「自助」、皆で共同して守る「共助」、行政に頼む「公助」とあるが、行政に守ってもらうことには限界があること、隣の人を助けるためには自分を守ることが前提であること、自分を守ってみて初めて「共助」や「公助」のあ

りがたみが分かる。このこと踏まえて、「自助」の精神が一番大事であると考えている。

この「自助」の精神を後世に残していくことを目的として、自主防災意識の父子三代に渡る継承、災害体験や、氾濫区域に住む住民が意識すべき災害への備えと対応について、伝統技術を見学に訪れる地域住民等へ伝承を行っている。

2. 先代から学んだ水害に対する備え

明治40年（1907年）に浅草で創業した先代は、明治43年（1910年）の荒川の大水害を経験し、水害に対する備えの重要性を認識した。

我が家が、大正12年（1923年）の関東大震災を受けて現在の地（東京都葛飾区新小岩：荒川放水路の左岸すぐの地）に移転してきた時は、周辺は一面の蓮の田んぼだった。池を掘った土で盛土し、その上に学校や工場を造った。そのような土地のため、縦横に水路が走っていて、そこで反物を洗っていた。

戦後間もない昭和22年（1947年）のカスリーン台風による氾濫被害を経験した。

この時、先代は「利根川の堤防が切れた」という情報を耳にすると、町ではお祭りをやっている中、明治43年（1910年）の大水害の経験から、間もなくくる水害に備え、5日間にわたり連日連夜、荷物の片付けや、飲み水の確保のため瓶という瓶に水を入れたり、舟を確保するなどの準備を行った。

「これ以上、準備のやりようがない」というくらい準備を行ったからこそ、浸水による被害を最小に抑えることができた。

新小岩駅から市川方面の一帯は、完全に濁流で冠水し、まるで湖のようであった。1～2時間の間に2メートルくらいまで水位がだんだん上昇した。

そのような状況で、私は先代と一緒に舟に乗り、助けを求める人たちを何人も助けた。

先代から水害に対する備えの重要性を学び、その後、自宅や隣接する工場等の改築にあたっては、カスリーン台風における氾濫の際上昇した最高水位を染物工場の柱に刻み、基準として記録し、地域の水防資料に活用している。



建てた工場の柱にカスリーン台風時の水位を刻む



反物を洗うための舟

3. 自主防災活動の伝承

昭和38年（1963年）には、カスリーン台風における氾濫の時に行った水害に対する備えの経験をもとに、自宅の横に水屋を建築し、江戸小紋作品にはなくてはならない貴重な型紙が浸水による被害を受けないように、高い位置に保管している。

敷地内には、水路が縦横に走っていた時代に反物を洗うために使用していた舟を今でも常備しており、水害の時のために備えている。

また、水屋や自宅の建築にあたっては、水害だけでなく地震に対する防災対策も行っている。自ら地震被災地に行き、トタン屋根の家が壊れていなかったことを確認した先代の教えを守り、これまで瓦で家を造ったことはなく、ステンレスなどの屋根に統一している。

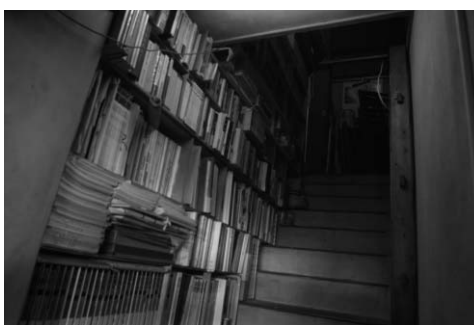


昭和38年に造った近代水塚

カスリーン台風における氾濫被害や、それに対する備えと対応などの経験を、広く水害に関するフォーラム等で紹介するとともに、カスリーン台風時の災害経験から学び、先代から引き継がれた災害に対する備えを、自宅と染物工場など伝統技術を見学を訪れる地域住民等を対象に、染物工場内などを案内している。

自宅や染物工場での案内は、江戸小紋作品の制作作業の合間を縫って行っており、伝統技術者自らが案内している。

染物工場や水屋は、江戸小紋の非常に貴重な芸術作品を制作、保管している場所であり、伝統技術の見学者など外部の者を立ち入らせることは、芸術作品の制作にとってリスクは大きいですが、それ以上に自主防災の伝承にとっては良いことであると思ひ、案内を継続して実施している。



近代水塚の内部

4. 地域防災力の向上に向けて

少子高齢化や、旧来型の地域コミュニティの衰退、都市構造の変化などの社会的状況の変化を踏まえると、行政による対策に頼るだけでなく、「自分で自分を守る」という「自助」の精神、自主防災の意識が益々重要となっている。

また、地球温暖化による気候変動に伴う降水量の変化や豪雨の発生頻度の増加が予測される中、行政による対策を待つだけではなく、「明日、災害が

発生するかもしれない」という意識のもと、水害に備えることが喫緊の課題だと考えている。

地域の防災力の向上には、「自助」、「共助」、「公助」のバランスが必要であるが、社会的状況の変化の中で衰退をみせる「自助」を、都市部の中にあっても継承していくことは、地域防災力の再構築のきっかけを与えるものであると思います、機会があるたびに自宅や染色工場を案内している。

この取り組みは、見学される方々の五感を刺激し、効果的に自主防災の重要性を伝えられるものと考えている。

5. 今後の活動計画

伝統技術の継承にあたっては、伝統を守る防災の重要性についての継承も行っていく。伝統技術に併せての継承であることから、自主防災に対する意識が長期的にわたり継続するものである。

また、今後も行政に頼らない自主防災の重要性を伝承するため、父子三代の水害経験やその対策をもとに、氾濫区域に住む住民が意識すべき災害への備えと対応について、訪れる地域住民等に向けて情報を発信し続けていく。

6. おわりに

私が、先代からよく言われたのは「堤防が高くなればなるほど安心してはいけない」ということだった。近年の洪水でも、堤防が決壊して流れてくる水の勢いにより家屋に被害が発生している。堤防がなければだんだん水位が上昇するため、水の勢いが小さくなり家屋に対する被害は少なくなる。

行政が、堤防を高くして堤内地を守れば守るほど、堤防を壊して流れてくる水の勢いは大きくなる。10年に一遍ごと水害があったのが、100年に一遍になるかもしれないが、それを覚悟して、「自助」の精神にもとづいて、水害に対して準備をしておかなければならない。

小宮 康孝 小宮 康正

※次頁に参考資料あり